

は通用しませんから、生徒はキヨトンとしてゐるのです。ねんごくせえ、これは年功臭えでしよう。子供が心得顔にてんごうしてゐると、よくこう言つて叱られたものです。

はんど 明治・大正時代まだ水道のない時分には、この家の台所でも必ずこのはんどが一つはあつたもので、私共も毎朝死んだ兄と二人で、にないで大手前の井戸から水を汲んではこのはんどに入れたものです。何故この水がめきはんどと呼ぶかを知りませんが、半斗甕或は半徒甕とも書き、朝鮮ではよくこのはんどに沢山朝鮮漬を仕こむので、或は朝鮮漬かとも思ふのですが、朝鮮では「トツ」と呼ぶ、まあこれは米を半斗も入れる極大なる壺という意味からでしょう。また半洞とも書いたのがあり、これは大人の半分位という意味からかとも思つてゐます。昔の水汲みの苦勞を思ふと、隔世の感がある。實際に、この小学三、四年生の時のにないで水汲みは、六尺が肩にメリにお様で、冬などヨタヨタ歩き、着物の裾に水がこぼれかかり、今の子供はこんな苦勞を知りません。

ふ 「ああ、フがよかつた。本当なら大怪儀をしようとこゝろじゆつた」これは不運のふではないでしょう。また、不図のふかとも思ふのですが、次の「ふとぎらぬ」のふは、胃の腑など云うあの腑の方で、つまり腹の体か間をなしに、次から次へと食ひ散らかすから腑を切らぬで、よく何が何をか分らぬ場合にも、腑に落ちぬと言います。これは腹に入らぬ、呑みこめぬ場合のことで、文字は同じ事となります。

まだ申威の躰の大漁、以下沃出残つていますが後便といたしまして。以上史談誌受領方々。匆々 敬具

史話

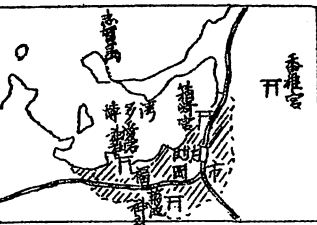
鷲尾城跡を訪ねて

—— 博多の神社をめぐる ——

会員 佐 脇 貫 一

さる五月二十日、私は福岡市西区の愛宕神社へ正確に鷲尾・愛宕神社に参拝した。それは同神社の鎮座する愛宕山(標高六十二呎)が、昔の鷲尾城址で、元弘三年(一二三三)五月二十五日、鎮西探題として九州各地の守護・地頭にらみ及びをきかしていた北条英時が、大友・少貳・島津氏などの連合軍に攻められ、力竭きてこの鷲尾の城館に自殺し、九州における北条氏の覇権が亡んだ史跡であることを知つたからである。

この山は古い時代には鷲尾山といつて、天徳親耳尊・伊弉諾尊を祀る鷲尾神社があつたが、寛永十年(一六三三)時の福岡藩主黒田忠之が山城門の愛宕神を勧請、崇敬したので、以来愛宕山と改めたという。



五月二十二日(元弘三年)大宰少貳妙徳(少貳貞終)一万をひき、探題城に向う。秋月・三原・荦野・味坂(露坂)・神代・江上・小田・高水・國分・龍造寺・千葉・綾部等の郡吏これに従う。大友入道具徳(大友貞宗)五千をひきこれに会す。尹次・白井・田原・新開・佐伯・吉弘・竹搦・紀井・長野等これに従う。」

〔歴代鎮西要略より〕

私はこの鷲尾の探題城攻めは、佐伯氏が大友貞宗の配下として加わっていることに興味を覚えた。この時代の佐伯氏は七代惟仲のころで、国衆の地頭御家人として、ようやくその存在が認められた時期であった。それだけに豊後守護職大友氏の忠実な部下として、去就を共にしたのであるが、佐伯氏の記録には、この時代の筑前出陣について記したものが少ない。

前掲の歴代鎮西要略に記されている佐伯氏が、若し七代惟仲であるとすれば、元弘三年から三年後の建武三年(二三三六)、惟仲は足利尊氏の命をうけ、日向地方の経路にあたっていた島山義顯(直顯)に属して、肝付兼重と戦っているから、時代的に符合する。

もつとも、豊府圖書などに記述されている鷲尾探題城の攻撃は、少貳妙恵でなく、その子頼尚が主役で、頼尚は一万の兵をひきいて押寄せ、空見川(愛宕山下を流れる川)を渡って鷲尾城を攻め、一の木戸を守っている宗像大宮司、山家筑前守の軍兵と戦った。そして大友貞宗はその後方にひかえて陣を布き、直接城攻めには加わっていない。それというのも、探題方であった松浦党をはじめとする肥前の軍兵が、寄手(少貳、大友勢)の勢威をみて寝返り、案内知った城内に攻めこんだため、一の木戸を守備していた宗像、山家が少貳の陣に降ったので、城内は北条英時の一族郎党だけとなった。乱入した兵士たちは城館に火を放った。英時はもはやこれまでと、居館に火をかけて自刃し、一族郎党三百四十人がこれに殉じたと伝えている。

いま愛宕山の西方煙の浜にある御塔山という丘間に、鎮西探題の墓と伝える石塔があるというので、数日後御塔山付近に行き、探して見たが、とくにこの付近は市街

化がはげしく、尋ねたすことができなかった。

ともあれ、この城攻めに大友貞宗がどんな役割をしたか、はつきりした史料がないのでわからないが、佐伯氏が大友方の一将として従軍していたことはたしかである。探題北条英時の籠った鷲尾山城は、弘安四年から元応二年(一一八一—一二二〇)の間は、次の元軍来寇に備えるため築かれたものといわれ、鎮西奉行所(輪田神社付近)にあったという探題館とはちがいが、万一の変に備える山城であった。

帰途にいった私は、道を市内西區七隈方面にとり、菊池神社に詣でたが、これは菊池武時(寂前入道)を祀る社である。

鷲尾城攻めに先だつ元弘三年三月十三日、肥後の菊池武時は後醍醐天皇の密旨さうけ、少貳、大友両氏と密議して鎮西探題襲撃を画策したが、この行動を探題方に疑われて機を失い、少貳、大友が離反してしまったので、武時は「少貳、大友の輩を味方と思つたのは、自分の間違いだつた」と、単独で探題館に攻め入り、力戦死闘の末、一族郎党もろとも討死した。後世、菊池武時の首塚と伝えられるものが、福岡市内に二ヶ所あった。その一つが七隈権の水の首塚で、現在の菊池神社である。いま一つは鳥飼の馬場頭(六本松付近)というところにおつたが、市街地となつて場所不明という。

私はさらに、上川端町(博多区)の櫛田神社に参詣して、この一連の史話の思いをばせながら家路についた。

(おわり)

(付記)

佐伯史談のレギュラーともいいうべき会員ですが、今回京都府から福岡市に転居なさった。御寄稿どうが以前にもまして願ひ度い。御住所 福岡市東區百浜岡地八二佐脇医院内 (用)